

釘本久春とハワイの日本語

—1965年における日系人社会の日本語環境—

斎藤 達哉
王 伸子

1. はじめに

1. 1. 釘本久春のハワイでの活動を調査することの意義

釘本久春（1908-1968）は、戦前から戦後にかけて文部官僚として国語施策に関与した人物である¹。1940年代前半は、図書監修官の職にあり、日本語教育振興会常務理事も兼務して、外地への日本語普及政策に携わった。終戦直後から国語課長、ユネスコを担当し、文部省を離れた後も1960年代初頭の日本語教育の学会創設にも参画するなど、日本語教育分野の足跡を見ることができる。

1940年代前半を起点とし、1968年にこの世を去るまでの釘本久春の活動について記録・分析することで、戦前から戦後にかけての日本の言語政策の担当官が、どのような視点をもっていたのかの一端を知ることができる。

1. 2. この論文の着眼点と目的

本稿では、ハワイ教育会が新たな日本語教科書の執筆を釘本に依頼した時期の、ハワイ日系人社会の日本語環境に焦点を当てていく。

釘本の日本語教育との関わりは、次の4項に整理することができる。

①1939年～1940年代前半における外地への日本語普及政策

釘本が文部省で務めていた図書監修官は国定教科書の編纂を目的とした職であるが、同時期に外地への日本語普及を行っていた財団法人日本語教育振興会が文部省（国語課）内に置かれていたため、同会の常務理事を兼務していた。日本語教育振興会は1941年8月に文部省が主導して創設され、

¹ 釘本のライフストーリーについては、河路（2019）に詳述されている。

日本語の普及に関する調査・研究を行い、教科書『日本語教科用 ハナシコトバ』上・中・下の編纂・刊行を行った。このほか、機関誌『日本語』や、文法書『日本文法教本』（1943）の編纂、日本語教育叢書²の刊行を行った。

五味（1987）によると、釘本は、『日本語』誌への執筆回数上位者³であったという。釘本は、振興会との関わりの中で日本語教育に関する知識を蓄積していったと考えられる。

なお、文部省図書局（国語課）が所管し、1939年と1941年に外地の日本語教育担当者を一堂に集めて開催した国語対策協議会でも、第2回の議事録取りまとめを行っている（斎藤（2015）、斎藤・鈴木・氏原（2015））。

②1960年からの東京外国語大学における日本語教育

釘本は、1960年、東京外国語大学に赴任した。東京外国語大学の教授となったのは、「国費学部留学生に対する予備教育が、それまでの1年制から3年制に変更となり、東京外国語大学に文科系留学生のための3年制予備教育課程が設置されたため」（嶋津（2017）、425-426ページ）であったという。

釘本家には、この間の辞令（いずれも昭和35（1960）年のもの）が保管されており、それによると、この人事は釘本を段階的に異動させることで、教授職に固定するというテクニカルなものであった。第1段階では、東京外国語大学が事務官に採用し、同時に文部大臣が教授を併任させることを命じた。第2段階は、文部大臣の命で行政職から教育職（教授）に転任させ、学長の命で留学生課程を担当させた。

- ・ 4月19日 文部事務官行政職（一）に採用（任命権者 東京外国語大学長）
- ・ 4月19日 文部教官（東京外国語大学教授）に併任する（任命権者 文部大臣）

² 日本語教育振興会が刊行した日本語教育叢書には、三宅武郎（1944）『現代敬語法』、湯沢幸吉郎（1944）『現代語法の諸問題』などがある。

³ 五味（1987）の調査によると、『日本語』誌への釘本の執筆回数は10回で、大出正篤の13回に次ぐ2位であるという。

- ・12月26日 文部教官（東京外国語大学教授）の併任を解除する（任命権者 文部大臣）
- ・12月26日 文部教官教育職（一）（東京外国語大学教授）に転任させる⁴（任命権者 文部大臣）
- ・12月26日 留学生課程を担当させる（任命権者 東京外国語大学長）

③1961年からの「日本語教育学会」の創設

1962年6月に同学会が刊行した雑誌『日本語教育のために』創刊準備号の巻頭論文は、釘本の「外国人に対する日本語教育小史覚え書」であった。また、定期刊行する機関誌『日本語教育』第1号巻頭も釘本の「機関誌「日本語教育」発刊の意義」であった。こうしたことから、中心的な役割を負っていたことが読み取れる。

④1964年以降のハワイでの教育活動及びハワイ教育会の日本語教科書執筆

帰国後釘本が投稿した論文では、「私は、1964年の9月から1965年9月にかけて、1年間、招きによってハワイ大学で、日本語を教えた」（釘本（1966））とあるが、招聘元については、州立のハワイ大学なのか、合衆国の政府機関であるEast-West Centerなのか明確ではない。釘本家には、釘本の辞令類が多数保管されており、その全てを閲覧する機会を得たが、招聘状等は含まれていなかった。

また、同時期に、ハワイホノルルに本部を置く、日系人子女を対象とした日本語学校の連合組織「ハワイ教育会」から日本語教科書（小学生向け）の執筆を依頼され、第3学年まで刊行している（1968年の釘本逝去により第4学年以降は阿刀田稔子が執筆）。

上記①、②、③に共通することは、日本語を母語としない人への日本語教育であることである。

ところが、④の中の教科書執筆は、海外へ移住した日系人社会の中での日本語教育であるという点で、少し異なるものであった。釘本は、①でも教科書編

⁴ 文部事務官行政職（一）から文部教官教育職（一）（東京外国語大学教授）への転任である。

纂を経験しているが、④での教科書は、日本政府の政策が及んでいないコミュニティで使用されるものである。しかも、当時の日系人社会の中で、教師の世代にとっての日本語は母語であり、学習者にとっての日本語は第2言語に近いものであるというねじれが生じていた。

1965年当時のハワイにおける日系人の日本語学習者は3世、4世がその中心を占めていた。彼らにとっての日本語は、もはや「母語」（あるいは国語）ではなく「外国語」になっていた。ハワイ大学マノア校ハミルトン図書館に収蔵されているハワイ教育会の活動記録・議事録「布哇教育会記録簿」（Call Number: LC3173.H3.H393）の内容を追うと、ハワイ教育会は、1965年に釘本久春に対して日本語教科書『にっぽんごのほん』の編集を依頼した。しかし、釘本が提出した原案は同会傘下の日本語学校が望んでいた内容ではなかった。原案を大きく修正して完成した『にっぽんごのほん』ではあるが、今日の日本語教材の水準に照らすと、国語教科書の延長線上に位置し、日本語を外国語として学ぶ日系3世、4世の学習には難易度が適していないと評価せざるを得ない。「布哇教育会記録簿」からは、依頼者側にも執筆者側にも、国語教育と日本語教育との違いや、日系人社会での第1言語の交代に対する考え方が明確に整理されていなかったことが窺える（斎藤・王・高田（2019））。

釘本執筆の『にっぽんごのほん』の教科書としての実証的な評価については、

- (a) 釘本が編纂に関与した最初の日本語教科書である『ハナシコトバ』（1941年、日本語教育振興会）
- (b) 釘本がハワイにおける日本語の授業で用いたと考えられる『日本語読本』（1957年、国際学友会）
- (c) 『にっぽんごのほん』と同時期に釘本が執筆者の一人となった日本国内の国語教科書（1963年、大阪書籍）⁵

などとの比較・検討を経なければならぬので、別稿に譲ることとする。

⁵ 1963年に大阪書籍から発行された文部省検定済教科書の著者は、川端康成、浜田広介、釘本久春、熊沢龍ら22名となっている。なお、川端康成は、1969年3月から6月にかけて、ハワイ大学に招聘され、この間に後出のKeiko氏と親交を深めている（日本近代文学館（2019）『日本近代文学館』No.291、10ページ参照）。

本稿では、釘本がハワイ教育会から日本語教科書の執筆を依頼された1965年当時のハワイにおける日系人社会の日本語環境について、記録と整理を行った結果を報告しておきたい。具体的には、次の二つのことについて報告する。

- I. 釘本がハワイ大学で担当した科目内容は何だったのか
- II. ハワイ日系人社会の新聞表記はどのようなものだったのか

2. 釘本がハワイ大学で担当した科目内容

2. 1. 日系3世へのインタビュー調査

Gertrude Keiko Gerstle氏（以下、Keiko氏）は、ハワイ大学で釘本久春の授業を受けた経験のある日系3世である。稿者達は、山田しのぶ氏（釘本の長女）の仲立ちによって、Keiko氏へのインタビューを行うことができた。山田しのぶ氏は、1965年当時、釘本のハワイ滞在時に随行したときから今日まで、Keiko氏と親交を深めてきている。



図1 Gertrude Keiko Gerstle氏
〔撮影：王〕

インタビューは、ホノルル現地時間の2019年3月6日11時30分から約50分間行った。場所は、ハワイ大学マノア校の校地に隣接するEast-West Center (1601 East-West Road Honolulu, Hawai'i 96848 USA)、John A. Burns Hallのロビーであった。

インタビューは、Keiko氏と山田しのぶ氏に当時の思い出話をしていただきながら、調査者（斎藤達哉、王伸子、河路由佳）が質問を挟む形式で行った。

以下で引用するインタビューは、できるだけ録音に忠実に再現することを旨としており、言い間違い、言い直し、言い淀みなどもそのまま文字化している。

2. 2. Keiko氏の日本語学習

Keiko氏は日系3世（御両親とも日系2世）である。Keiko氏が家庭以外で日本語に触れたのは、小学校の頃からであり、場所はホノルルで町田辞保氏が

教えていた「和敬学園」⁶であった。そこは、アフタースクールであり、平日は日本語教室の機能を果たし、土曜日に茶道・華道といった日本文化の伝習をおこなっていたという。

釘本がハワイに滞在した1965年当時は、Keiko氏はハワイ大学の3年生（あるいは4年生）であって、教育学を学んでいたという。Keiko氏はハワイ大学でも日本語を学んではいるが、自身の日本語能力について、

(1) Keiko 「まあ、話すの、私、それはね。ただ、読み書きが…。」
という内省をされており、日本語は外国語として学んだと言ってよさそうである。

2. 3. ハワイ大学か、East-West Centerか？

釘本を招聘したのは、ハワイ大学であったのか、それとも、East-West Centerであったのか。Keiko氏は、釘本を招聘した組織がどちらであったのかは分からないとしながらも、授業そのものはハワイ大学正規の科目を担当していたと理解されていた。

(2) Keiko 「あのね、East-West Centerでなくて、私、大学だと思ったの。」

(3) Keiko 「Campusで。結局、その、日本語科の中の下だと思ったの、私は。」

(4) 山田 「ケイコちゃんは、なにに、ハワイ大学の何科だったの？」

Keiko 「一応、まあ、教育ですね。」

山田 「教育？」

Keiko 「そう、教育部門から卒業したわけ。」

山田 「第2外国語で日本語をとったの？」

Keiko 「あ、その一つの、なに、科目として。」

山田 「科目として？」

Keiko 「そうそう。」

⁶ ホノルルにある曹洞宗別院内で開設されていたアフタースクール。

Period	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday	Saturday
8:10						
9:10						
10:10						
11:10	J418 WEB304	J220	J418	J220	J418	
12:10	J104 (3A) K301		J104 (3A)		J104 (3A)	
1:10						
2:10						
3:10						
4:10						

図2 ハワイ大学での釘本久春の担当時間割表〔提供：釘本春良氏〕

2. 4. 釘本の担当科目数

Keiko氏には、釘本家に保管されていた「時間割表」も見ていただいた(図2)。その結果、「J」で始まる番号はコースコードであり、釘本は「J104」(月・水・金)、「J220」(火・木)、「J418」(月・水・金)の三つのコースを担当していたと読むのだからということが確認できた。

月曜日のコースコードの下に書かれている「WEB304」、「K301」については、建物と教室番号であることも判明した。「WEB」は「Webster hall」(図3)であろうということだった。「K301」の「K」については、インタビューの翌日に私達が滞在するホテルに電話を下さり「Keller Hall」(図4)ではないかという情報を知らせていただいた。招聘の費用の出所はともかく、釘本がハワイ大学の建物でハワイ大学の学生を対象とした授業を担当していたことがより明確にできた。



図3 Webster hall [撮影：斎藤]



図4 Keller hall [撮影：高田智和氏]

2. 5. 日本文学か、日本語か？

釘本がハワイで講じたのは、日本文学であったのか、それとも日本語であったのか。このことについて、Keiko氏は、インタビューの前半においては、

(5) 山田 「釘本久春先生の授業を覚えてません？」

Keiko 「全然覚えていません。」

としながらも、後半においては、

(6) Keiko 「語学でしょう。」

(7) Keiko 「先生は語学のために来ていらした。」

と即答されていた。

その授業の日本語教科書としては、何が用いられていたのかということについては、覚えていないということだった⁷。

⁷ 釘本が使用したと思われる日本語教科書については2.9で後述する。

- (8) Keiko 「あ、使った。使いましたけどね、何であったか、ちょっと覚えてない。」

2. 6. 日本語クラスの規模

釘本が担当した日本語クラスの規模は、学生が15~16人程度だったと考えられる。Keiko氏は、インタビューの後半になってクラスの規模の質問が出ると、次のように答えている。

- (9) 王 「Keikoさんのそのクラスは、釘本先生のクラスは、何人ぐらいでしたか？」

Keiko 「多分そんなに数…。あ、 $\times \times \times$ ⁸、多くて15、6人でしたでしょうねー。」

2. 7. 教授に用いた言語

釘本が説明に際して使用した言語については、日本語であった。

- (10) 王 「200番台のクラスは、釘本先生は日本語で教えたんですか？それとも英語で教えたんですか？」

Keiko 「たぶん日本語だと思う…。ってことは、あ、1はね、一応、その…。あーん、1はいちばん初心？ で、あの、2、3になると結局、あの、Levelが上がるわけなの、そう。そう、Level 1、Level 2…」

王 「レベル1では英語で教えたので…」

Keiko 「No。それは別として、あの、英語は別として。ただ、basicはLevel 1」

王 「はい、それでその、教えるときに…」

Keiko 「たぶんね、あの、先生は日本語だと思いますね。」

- (11) Keiko 「そうそう。Because、先生、そんなに英語を、話す、なくて。おいて、教えてないと思います。日本語だ、あ、日本語だと

⁸「 $\times \times \times$ 」は録音音声不明瞭で文字起こしできなかった箇所である。



図5 マノア渓谷を見下ろす自宅ベランダからの景観を説明するKeiko氏。左は山田しのぶ氏、右は王伸子
〔2019年3月8日、撮影：斎藤〕

思います。』

山田 「英、英語はあんまり話さなかった？」

Keiko 「そうそう…」

王 「クラスに入ってきても、『おはようございます』って言って、
教えたんですよね。」

Keiko 「あ、そうそう。」

2. 8. 教室の外での釘本の姿

Keiko氏は、釘本の行った授業内容については覚えていない様子であった。むしろ、鮮明に思い出せるのは、教室の外での釘本の姿の方であったという。

Keiko氏（堀井家）が当時居住していた家は、マノア渓谷を見下ろす高台に立地し、ラナイ（バルコニー）からはホノルルの街とその向こうの海が見渡せるようになっていた⁹（図5）。釘本は、堀井家を訪れ、夕陽や月を眺めては、

⁹ 2019年の時点でも、Keiko氏は1965年と同地に居住されている。家屋は建て替えられているが、2019年の調査では、御自宅にお招きくださり、バルコニーからの眺望を体験することができた。

古典の和歌の話をしていたという。

- (12) Keiko 「あの、あれ、よく、いろんな詩をね。詩を、あの、『万葉集』
だったり、何でもそう。それを…」

山田 「よくね。」

- (13) Keiko 「背景を見るとか、海で、向こうの海を見ることができたので、
だからその、夕陽？ の沈みやら、そういうときに先生よく
いろんな詩をね、思い出して、」

山田 「よくね。」

Keiko 「そう。」

山田 「あの、素敵なの、山の上におうちがあってね、お月さまが出
たときよ、月の短歌とか…」

Keiko 「そうそうそう。十五夜も思い出して、」

釘本が中世の和歌研究¹⁰や創作活動¹¹など、日本文学の分野の活動を好んで
行っていたことはよく知られており、ハワイでもそのことが頭から離れずにい
たことは想像に難くない。

2. 9. 釘本のハワイ滞在中の授業計画メモの存在

稿者は、招聘に際して釘本に期待された分野が日本語教育であったとしても、
日本文学や日本文化についても講じていた可能性があることを漠然とではある
が想像していた。Keiko氏から、堀井家での釘本の姿を聞くにつけ、釘本がハ
ワイ大学で日本語教育以外も講じた可能性を捨てきれないと考えた。

そして、帰国後に、関係資料を読み返す中で、釘本が日本語教育に用いた教
科書や、授業で語学（日本語）以外も講じたことを示す資料の存在を確認する
に至った。

¹⁰ 釘本の研究者としての専門分野は、中世文学（和歌文学）である。釘本は、久松潜一の下でまとめた論文を1944年に『中世歌論の性格』（古今書院）として刊行している。

¹¹ 釘本家に残っている資料の範囲でも、第一高等学校在学中の『交友会雑誌』、1930年前後の同人誌『しむぼしおん』、1960年代の同人誌『構不欲』に作品を掲載していることが確認できる。

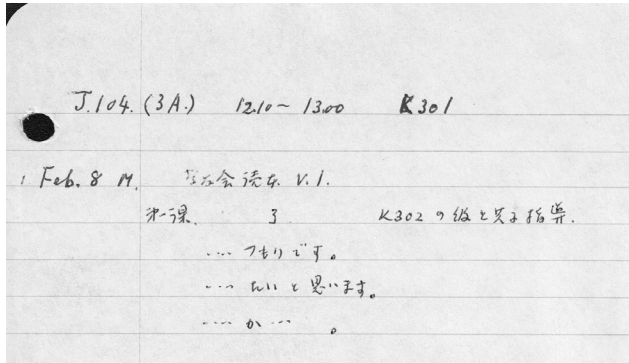


図6 「J104 (3A)」の授業に関するメモ〔提供：釘本春良氏〕

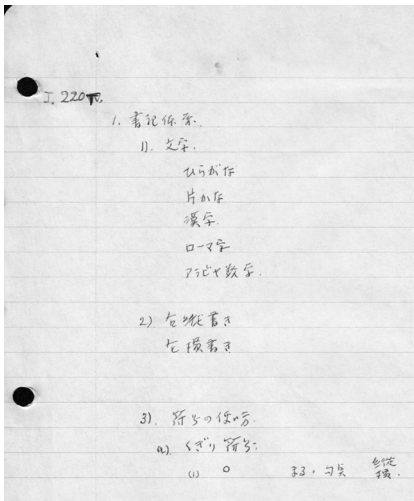


図7 「J220」の授業に関するメモ〔提供：釘本春良氏〕

その資料は、2017年9月29日に釘本家から借用しデジタル撮影をした資料群の中の、ハワイ大学の校章の入ったルーズリーフであった。再度読み進めるうちに、「J104」、「J220」、「J418」と記されたメモがあることに気付いた。(図6、図7、図8)。

図6「J104」の授業は、12:10～13:00までK301教室で行われたと読める。メモ中の「学友会読本v.1」は、『日本語読本』（1957年、国際学友会）のことであろう。

同教科書は、関（1997）によると、次のように説明されている。

編者の鈴木忍と阪田雪子が他の教員の協力を得て作成した。1941年～1943年に発行された『日本語教科書巻1～巻5』の形式を継承した読み書き中心の読本だが、総合的な日本語教科書として長沼の教科書とともに、戦後

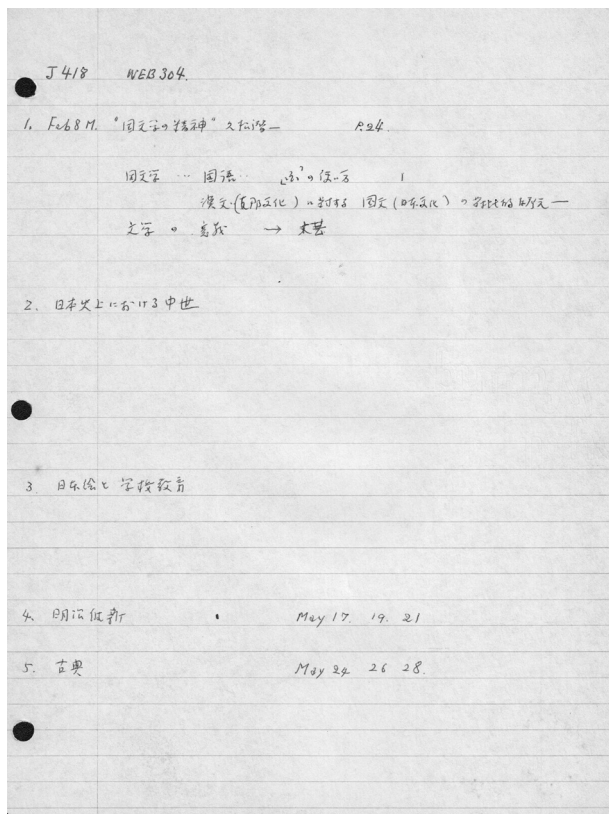


図8 「J418」の授業に関するメモ〔提供：釘本春良氏〕

30年余り国内外を問わず広く使われた。(193ページ)

「J104 (3A)」の授業のメモ内容は、「…つもりです。」「…たいと思います。」「……か……。」という構文の学習を推測させる。「J104 (3A)」は、初歩の日本語文型を学ぶ授業であったようだ。この授業の存在は、Keiko氏が、「語学でしょう」、「先生は語学のために来ていらした」という記憶と一致する。

図7の「J220」の授業のメモからは、最初に「書記体系」を扱っていることが分かる。「1) 文字 (ひらがな、片かな、漢字、ローマ字、アラビア数字)」、

「2）右縦書き 左横書き」、「3）符号の使い方」などを学習したことが推測され言語としての日本語についての概説的な内容であったようだ。

図8の「J418」の授業のメモからは、同授業が「WEB304」教室で行われていたことが分かる。「1. 『国文学の精神』久松潜一」、「2. 日本史上における中世」、「3. 日本絵と学校教育」、「4. 明治維新」、「5. 古典」という項目立てからは、日本文学・日本文化を中心に据えた授業であることが推測できる。とりわけ、自身の恩師・久松潜一の著作の後に、中世¹²に焦点を当てていることなど、釘本の学問的指向が色濃く出た内容と言える。

「J418」の授業メモは、釘本が語学（日本語）を教えるだけでなく、日本文学や日本文化についても講じていたことを物語っているといえる。

3. 日系人向け日本語新聞の表記の不統一を釘本はどう受け止めたのか

さて、ここからは、視点を変えて、ハワイの日系人社会の日本語環境に対する釘本の受け止め方について見ていく。

ホノルルの日系人向け日本語新聞『布哇タイムス』は、1965年に行われた釘本のラジオ講演を連載している。その中で釘本は、1965年の『布哇タイムス』の日本語表記についても言及している。

3. 1. 『布哇タイムス』

『布哇タイムス』は、1965年当時、ハワイの日系人向け日本語新聞の一つであった。鈴木（2017）『ハワイの日本語新聞雑誌辞典』によると、『布哇タイムス』と称する新聞は2紙あったという。一つは、久保浪位（瓶二）が創刊し、ヒロで1914～1918年頃まで発行されていた新聞である。もう一つは、『日布時事』が1942年に紙名変更して、ホノルルで1985年まで刊行されていた新聞（相賀安太郎が初代主筆）である。本稿で扱うのは後者の『布哇タイムス』である。

『布哇タイムス』の1965年当時の社長は相賀重雄で、同年の発行部数は、15,000部と言われている。鈴木（2017）によると、

¹² 前出の注9を参照のこと。

『布哇タイムス』の前身である『日布時事』は、1925年6月に日本の通信社である「電通」「帝通」「東方」と契約し、同年に平版輪転機を、1928年に新活字鑄造機2台を日本から購入している（46ページ）とあり、『日布時事』時代から本格的な印刷機械を導入した紙面作りを行っていたようである。

しかし、戦後は、印刷機械を更新することが困難になり、1970年代後半から活字の摩耗が激しく、紙面の質が低下して、発行部数が落ちる。1982年5月29日で日刊発行を停止。カカアコにオフィスを移し6月1日から週刊で発行が続けられるが1985年3月で廃刊（57ページ）という運命を辿った。

3. 2. 『布哇タイムス』の表記上の特徴

釘本久春のハワイでの講演の連載記事（縦組み）を資料として、『布哇タイムス』の日本語表記について、記述・整理すると以下ようになる。

(1) 漢字字体

旧字体の活字が使用されている。

(2) 平仮名字体・片仮名字体

現在も日本で通用しているものと同様である。変体仮名が用いられていないことも同様である。

ただし、促音・拗音の表記に用いる小書きの仮名は見られない。

〔例〕促音：「もつと」（8月26日）、「ハッキリ」（9月14日）

拗音：「じゃないか」（9月3日）、「ゆしゆつ」（9月24日）、
「サイド・ジョブ」（9月20日）

(3) 仮名遣い

送りがなも含めて「現代かなづかい」（昭和21年9月21日、内閣告示）に近く、歴史的仮名遣いと比べて、より表音的な表記である。

(4) 繰り返えし符号

一つ点「ヽ」や、くの字点「く」が使用される場合がある。

繰り返えし符号は、使用される場合（例、「こヽ」）と使用されない

場合（例、「ここ」）との両様が見られるが、ひと続きの記事の中に両方が併存することはない。

(5) 句切り符号

文中に読点「、」が用いられるが、文末には何も付されない。

ただし、二重鉤括弧内やダブルクォーテーション内に複数の文が含まれる場合には、文と文との間に、句点同等の役割を負わされた「、」が使用される。

〔例〕『それはいい^{ちやくがん}着眼だ^{おも}と思います、私^{わたし}も^{かん}そういう感じがします』

(9月20日)

(6) 引用を示すための符号

カコミ「[〃]」、フタエカギ「『 』」の両様が見られるが、一続きの記事の中に両方が混在することはなく、使い分けも認められない。

(7) 振り仮名

本文は「総ルビ」であり、見出し等を除く本文中の漢字には原則として振り仮名が付されている。

ただし、本文中であっても、数字として用いられることの多い漢字「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、千、萬」には、振り仮名は付されていない（「^{ばん}一般」「^{かた}片^{ほう}一方」などでも振り仮名は付されない）。

振り仮名は、歴史的仮名遣いによるものであり、振り仮名の中では一つ点「ゝ」や、くの字点「く」も用いられる。

(8) 当て字及び同音の漢字の誤用

漢字の当て字の使用が目立つ。

また、熟語の表記には、同音の漢字の誤用（誤字）が見られる。

〔例〕×得点←○特典、×大持←○大事、

×相等←○相当、×仲々←○中々

語義に差が見られない同音の和語に2通りの漢字表記が当てられていることもある（ただし、この二つが同一記事の中に混在することはない）。

〔例〕「解る」／「分る」

(9) 漢字の送り仮名は、字数の少ない方を用いる傾向がある。

〔例〕「少くとも」、「就て」

(10) 漢字を当てることのできる語には漢字を使用する傾向(漢字多用の傾向)が認められる

〔例〕「～する時」

3. 3. 釘本久春のコメント『布哇タイムス』の日本語表記について一

『布哇タイムス』は、釘本の談話に基づく「日本語に関する考想」を、1965年8月25日から11月15日にかけての49回¹³にわたって不定期に連載した。

この連載は、釘本による書き下ろしではない。ホノルルで日系人向けに行われていた日本語によるラジオ放送(KOHOラジオ¹⁴)において、釘本が話した内容を『布哇タイムス』の記者が記事に書き起こしたものである。

日本語に関する考想 KOHO放送局を通じ釘本久春教授の講話

目下ハワイ大學で日本語及び日本文学を教授している東京外國語大學教授釘本久春氏はKOHO放送局の懇請に應じて、毎週月曜から金曜まで、毎日午後二時十五分から三時まで『日本語に就いて』講話をし一般から大好評を受けているが、聞きもらしの人もあるので、その講話を本紙々上に連続的に記載することになった。

(1965年8月25日、連載第1回のリーダー部分。原文縦書き、ルビ無し)

『布哇タイムス』紙上での連載名は「日本語に関する考想」であるが、連載第1回のリーダー部から、ラジオ番組としてのタイトルは『日本語に就いて』であったとも考えられる¹⁵。

¹³ 1965年11月15日の連載最終回の回数表示は(51)となっているが、途中で番号の重複と欠番がそれぞれ1回ずつ生じているため、実際の連載回数は49回である。

¹⁴ 「KOHOラジオ」は、ホノルルから放送されていた日本語AM放送局(周波数1170kHz)。1959年に開局し、2000年に閉局した。

この連載記事の中で、11月1日連載分は、與儀布哇タイムス記者との対談形式であり、最初の話題は「ハワイの新聞の活字に就て」であった。與儀記者については、フルネームも経歴も未詳である。鈴木(2017)所収の「日本語新聞雑誌人名事典」にも與儀記者の名前は見当たらない。

ハワイの新聞の活字に就て

釘本『今日は新聞人の與儀さんとお目に掛ることが出来た譯ですが、實はこの前に書かれている言葉としてハワイの書き言葉について氣のついたことを申し上げましたが、こちらの新聞の中に現れて来る特別な言葉など一まを上げました、その中で漢字の問題ですが、よくハワイの方に聞かれるのですが漢字の字體が日本内地の新聞の字體と違っていること、また學校の教科書の字體と違っていることです、それはどういう譯だとよく質問を受けるのですが、それは私は古い字形の漢字も使つておられるが、これは活字の問題であつて活字については仲々問題のあることで、ただ言葉の問題だけでなく經濟的問題とか、色々な問題を考えなければならぬと思ひます、當用漢字表¹⁶では例えば、濱、という字をサンズイに賓という字を書くのを、今はやさしい字體をとつています、^{くに}國、という字も中に玉を書いている、しかしハワイでは前から使われている字體の活字を使つておられる、そういう點で新聞社の御事情などをお話し頂けませんでしょうか』

與儀『當用漢字とここの新聞で使つている漢字との相違があることは私どもが原稿を書く時には、出来るだけやさしい當用漢字を使うようにしていますが、活字を拾う方では昔の活字を拾うようになっていきます、新聞社としても勿論當用漢字の活字にしたいと思つている譯な

15 釘本家に保管されているKOHOラジオ放送のため準備メモ(釘本ノート)では、「日本語のさまざま」と記されている。

16 「表」のルビは「ひやう」だと思われるが、マイクロフィルムからは読み取れなかった部分を□印とした。

んですが、一度に全部の活字を變えることは經濟上仲々むずかしい問題で、現在では出来るだけ當用漢字の活字に變えるよう努力しています、もう一つは、この方で前の漢字に親しんでおられる方にとっては急に變えると、分りにくく、また親しみがなくなるのです、しかしこれは早く當用漢字の活字に全部を變えるべきであると思っています』

釘本『そういう點では、内地の新聞と同じ方針を持つていられる譯ですね、ただ經濟的な理由やまたこの讀者にとつて馴染深い字形を使つて行こうというのは理由のあることとおもいます』

3. 4. 新旧混在の理由

3.2で整理したように、『布哇タイムス』の日本語表記上の特徴としては、新旧が混在していることが挙げられる。

『布哇タイムス』に古い表記が残った背景は、與儀記者の説明によると、經濟的事情、讀者世代への配慮の二つの事情が絡み合っている。

第1の經濟的事情については、與儀記者は、經濟的な事情によって新字体の活字の鑄造は十分ではなかった旨を述べている。第2の讀者世代への配慮については、旧漢字の使用と、旧仮名遣い（字音仮名遣い）のルビ、促音・拗音を小書きしないことが該当する。

しかし、稿者は、第1 經濟的理由が最大の理由ではなかったかと考える。

日系人社会でも生活言語が英語になっていく中で、讀者層は高齢化が進むと同時に、広がりが見込めなかったであろう。鈴木（2017）では、この時期の日本語新聞の経営は苦しいものであったことが随所から読み取れる。

さらにもう一つ、與儀記者の説明では触れられていないが、総ルビの新聞であるがゆえに、新たな活字の鑄造に踏み切れなかったのではないかという疑問も稿者は抱いている。日本の新聞は1940年代後半にルビ付き活字の採用を停止していた¹⁷。1965年当時、複雑なルビ付き活字の鑄造を依頼する先の見込みがあったのかという技術的な問題が存在する。漢字を新字体にすることは、字体の問題だけでなく、「総ルビを廃止する」というより大きな転換に踏み切

ることであつたと考えられる。「総ルビを廃止する」ことは、総ルビに親しんだ高齢者の読者層にとってメリットになることではない。また、総ルビを廃止して、日本の新聞と同じにしても、英語を生活言語とする若年層の日系人を読者層として呼び込む材料にはならなかつたであろう。

釘本が「経済的な理由やまたここの読者にとつて馴染深い字形を使つて行こうというのは理由のあることと思います」と理解を示している背景にはこうした事情が存在したのである。

結果的に、費用のかからない仮名遣いだけが改められ、「現代かなづかい」(1946年9月21日、内閣告示)に近いものとなつた¹⁸ために、新旧が混在の状況を作り出してしまったのである。

なお、仮名遣いを新しいもの(「現代かなづかい」)にすることは、少なくとも1965年当時の日系人社会で望まれていたことであつたと言えよう。例えば、釘本はハワイ教育会向けの教科書の第2次原案まで最初の単元で「表音式」で表記していたが、ハワイ教育会側は「初めから現代仮名使いにすること」(ハワイ教育会記録簿、1966年2月26日・27日)という修正要求を出している(斎藤・王・高田(2019)、14ページ参照)。

¹⁷ 「ルビ付き活字」については、朝日新聞百年史編修委員会(1990)『朝日新聞社史 明治編』(朝日新聞社)に「明治35年1月、大阪朝日の活版の責任者松田幾之助が、ふりがなと漢字とを一体した「ルビ付き活字」の鑄造に成功」「この考案は日本ではじめてで、のちに各社がまねたが、そのルビ付き活字が朝日の紙面から姿を消したのは、昭和21年である」(17-18ページ)とある。また、栗林貞一監修・大嶋棟次郎編『新聞漢字用標準漢字の研究』(朝日新聞社)からは、ルビの廃止は教育漢字を視野に入れながら実施されていったことが分かる。こうした「ルビ付き活字」の情報は、小林肇氏(日本経済新聞社)から御教示いただいた。

¹⁸ 試みに、“Hoji Shinbun Digital Collection”で公開されている範囲の『布哇タイムス』を調査すると、1942年12月1日、1942年12月30日、1943年1月2日、1943年12月30日、1944年12月29日、1945年12月29日の各日において、日本語ページは歴史的仮名遣いで表記されている。より表音的な仮名遣いに改めたのがいつであるのかは未調査である。

4. まとめ

本稿では

- I. 釘本がハワイ大学で担当した科目内容は何だったのか
- II. ハワイ日系人社会の新聞表記はどのようなものだったのか

について述べてきた。

「I. 釘本がハワイ大学で担当した科目内容は何だったのか」については、釘本は、ハワイ大学の教室で語学としての日本語の教授を中心とし、併せて、日本文学や日本文化についても講じた形跡があることを述べた。また、語学としての日本語の教授の教科書には、『日本語読本』（1957年、国際学友会）が使用された可能性が高いことも分かった。

「II. ハワイ日系人社会の新聞表記はどのようなものだったのか」については、『布哇タイムス』の場合、1965年の時点では、旧漢字と「現代仮名づかい」（1946年9月21日、内閣告示）に近い仮名遣いを用いていた。このことは釘本も知っており、理解を示す発言を残している。

以上、ハワイ教育会が新たな日本語教科書の執筆を釘本に依頼した時期の、ハワイ日系人社会の日本語環境を知るための材料を提示した。

謝辞

- ・本研究には、日本学術振興会科研費基盤研究（C）（JSPS KAKENHI Grant Number JP 17K02789 「1940-1950年代の日本語政策史研究の精緻化に関する緊急調査」）及び2020年度専修大学研究助成（「ハワイの日系人の日本語学習環境の研究—国語教科書から日本語教科書への転換—」）の助成を受けました。
- ・Gertrude Keiko Gerstle氏はインタビューに応じてくださっただけでなく、御自宅にもお招きいただきました。山田しのぶ氏はKeiko氏をはじめとした釘本を知るハワイ在住の方々をご紹介いただきました。河路由佳氏はハワイでの調査に御同行ください、卓越したインタビュー技術をもって調査に御協力下さいました。釘本春良氏は所蔵されている資料の掲載許可をくださいました。バゼル山本氏（ハワイ大学マノア図書館司書）、朝日祥之氏（国立国語研究所）からは『布哇タイムス』のマイクロフィルム調査に当たって多大な御助力をいただきました。高田智和氏（国立国語研究所）はハワイ大学図書館

での調査についてアドバイスをくださったほか、Keller hallの写真を提供してくださりました。以上、記して感謝申し上げます。

参考文献

- 河路由佳（2019）「戦中・戦後の文部官僚、釘本久春のライフヒストリー—他者の記憶からその人生を辿る試み—」『専修国文』104、pp.27-51、専修大学日本語日本文学文化学会
- 釘本久春（1966）「アメリカの大学生における日本語・日本文化の学習・研究—その目標と意欲について—」『解釈』12-11、pp.1-4、解釈学会
- 五味政信（1987）「戦前の日本語教育と「日本語教育振興会」」『日本語学校論集』14、pp.155-172、東京外国語大学外国語学部附属日本語学校
- 斎藤達哉（2015）「1941年の日本語普及状況—第2回国語対策協議会速記録（第1日）について—」『専修大学人文科学研究所月報』279、pp.81-88、専修大学人文科学研究所
- 斎藤達哉・鈴木泰・氏原基余司（2015）「【資料紹介】釘本久春所持資料—「第2回国語対策協議会速記録（第1日）」及び「日本語教科用図書調査会会議報告」—」『専修大学人文科学研究所月報』279、pp.1-80、専修大学人文科学研究所
- 斎藤達哉・王伸子・高田智和（2019）「ハワイ教育会『にっぽんごのほん』の編纂事情—国語教育と日本語教育とのほごま—」『専修国文』105、pp.1-41、専修大学日本語日本文学文化学会
- 嶋津拓（2017）「中島敦の『山月記』と釘本久春—はたして釘本は「哀憐」だったのか—」、『埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊2：仁科弘之教授退職記念論文集 言語をめぐるX章—言語を考える、言語を教える、言語で考える—』、pp.416-428、埼玉大学教養学部・人文社会科学研究所
- 鈴木啓（2017）『ハワイの日本語新聞雑誌辞典』、マイレボックスLLC（発行）、静岡新聞社（発売）
- 関正昭（1997）『日本語教育史研究序説』、スリーエーネットワーク
- 日本近代文学館（2019）「新収蔵資料紹介 川端康成の二枚の色紙」『日本近代

文学館』No.291、p.10、公益財団法人日本近代文学館

資 料

《1942-1955年の『布哇タイムス』紙面》

Hoji Shinbun Digital Collection : Japanese Diaspora Initiative

Hoover Institution Library & Archives 掲載の電子画像に依った

[<https://hojishinbun.hoover.org/?a=cl&cl=CL1&sp=tht>] (2021年6月28日閲覧)

《1965年の『布哇タイムス』紙面》

University of Hawaii at Manoa Hamilton Library マイクロフィルム、及び、釘本春良氏所蔵の実物紙面に依った